

作業着姿の猪瀬浩平さん(29)が足元をまじまじと見つめた。床板の所々に穴が開いている。

今日12日。さいたま市の「見沼田んぼ福祉農園」で、倉庫として使っている小屋の修繕作業が行われた。全体が傾き、出入り口の戸も開けにくくなっていった。

「こんなに腐っていたなんて」。そうつぶやいた浩平さんの後ろで、父、良一さん(58)の声があった。「これほど長く続くとは思わなかったもんな」

父が開いた農園は今年、10年目を迎えた。

浩平さんの兄の良太さん(34)には知的障害がある。農業、ジャーナリストだった父が、地元の農家から小さな土地を借りたのは20年前。良太さんに農作業を経験させるのが目的だった。

浩平さんが小学生だった時は週末ごとに家族と通った。深い森や漆黒の夜。そこには別世界があった。

だが、中学に入ると、部活動や友人とのつき合いが忙しくなって足が遠のいた。家族との距離を感じ始めたのは、高校に進んだころからだ。同級生から、父の仕事や兄について聞かれると、どう説明していいかわからなかった。

家族とほとんど口をきかなくなり、生まれ育った土地から離れた大阪大の人間科学部への進学を決めた。

大学2年になった1999年5月。父は農場を1畝に広げて福祉農園を始めた。それまでは家族だけで農作業をしていたが、障害者やボランティアを受け入れるようになった。

夏休みに帰省すると、農園で草むしりをやれ」と父に言われた。避けてきた相手だが、有無を言わせぬ口調に従うしかなかった。

その後も帰省の度に農園の仕事を手伝わされた。初めの何年かは苦痛でしかなかったが、波々手伝っているうちに、農業というものが少しずつ違って見えるようになっていった。

そんな自分を初めて意識したのは、東大大学院に進むため埼玉に戻った2000年の春だった。

ジャガイモを作ろうと、種芋を4分の1に切って植えた。本当に芽が出るのかと半信半疑だったが、2週間後、緑の葉がぼつぼつ顔を出し始めた。畑が新芽で埋まったのは、その1週間

後だ。あんな切れ端から、こんなに多くの芽が育つとは……。生命の神秘を目の当たりにした思いだった。失敗も繰り返した。

雨の翌日に耕運機をかけ、すっぽりと泥に埋もれたことがある。農業を使わずに枝豆を育てようとして、新芽をすべて青虫に食べられたこともある。そんな経験を重ねながら、苗が

父が師 福祉農園



兄の良太さん(右)と一緒にハーブを刈り取る浩平さん(左)。作業の様子を父の良一さんが後ろで見守る(さいたま市緑区の「見沼田んぼ福祉農園」で)＝関口寛人撮影



最初は渋々 ■ 「人つなぐ喜び」知った10年

実った時の感動は何物にも代え難いと知った。

翌年の1月。子供らにも農業に触れてもらおうと、農園の一区画で農作業の体験教室を開き始めた。しかし、教室の準備に追われるなどして本来の農作業がおろそかになり、畑は雑草だらけになってしまった。

この時に意



見したのは父だった。「知識も技術も十分じゃないのに、子供を受け入れるのは早過ぎる。まずは地道に農業と向き合うべきなんじゃないのか」

農園では今、約200人の障害者や若者が汗を流す。10年目を迎え、父にこう提案した。「これからは採算のとれる方法も考え、

徐々にならわっていった。農園から発電機や耕運機がこっそりと盗まれたのは一昨年5月のことだ。そろえ直す経済的余裕はなく、「もうダメかも知れない」と気持ちちは沈んだ。

だが、思いがけないことが起こった。地元の農家や企業から、中品や現金を寄付したいという申し出が約40件も寄せられたのだ。

(朝来野祥子)